『西南アジア研究』No. 26, 1987

バルチスタン先史文化四段階の設定

徐　朝龍

はじめに

バルチスタンで多くの初期農耕文化遺跡が発見されたのは，ハラッパー文化の起源をバルチスタンに求めようとしてインド考古学界がおこなった精力的な広域踏査による。ところが，この方向の検討が進展し，検討は予期されたほど簡明ではないことがわかってきた。しかし，ハラッパー文化の生成に関する「アイデイア説」〔Wheeler：1953〕の跳梁のもとで，なおもバルチスタン諸文化の由来を主としてこの伝播のなかに見ようとする一面もある。

バルチスタンは地理，自然環境および生態学の面において，西アジア世界と類似する面は少なくない。しかし，バルチスタン先史文化の展開を単に西アジア農耕文化の東方波及の一環としてのみとらえることには躊躇を覚える。西アジア農耕文化に対して，自らの系譜と規律性をもちつつ，地域文化として展開した面も強い。バルチスタン自体に視点を置き，その初期農耕文化の展開を編年的に検討することを本稿は目的とする。そこで対象地域の自然環境と先史遺跡の分布状況とを考慮して次のように「バルチスタン」を規定しておきたい。

東限は，インダス平野に対する地形上の差異により，設定できよう。北方は，Toba 山脈と Kaqar 山脈との南麓にそって，北部 Waziristan 山脈まで線をひき，アフガン高原部の高山地帯から切り離す。西方はやや複雑であるが，Quetta-Pishin 地方の西には，Helmand 砂漠がある。南方 Kalat 地方をへて Shireza まで下がる地域の西には，Kharan 砂漠がある。更に南行すると，Shahan 山脈と中央 Makran 山脈が東北より南西方向に走っている。これらの砂漠と山脈がバルチスタンの西界である。南方はアラブ海に面してイランの南東部に伸びる Makran 地方である。このようなバルチスタンを北部（Zhob Loralai を中心とする地域），中部（Quetta から Kalat 南部地方までの地域），そ

して南部（Kalat 南部地方から沿岸地帯まで）の三地域にわける。各地域の各文化の展開，相互関連，系譜を，土器文様を中心にとらえ，同地域における初期農耕文化の編年を試みる。

Ⅰ　農耕文化の初期段階

初期段階については，調査発掘が不十分なため，必ずしも明確ではない。中部バルチスタンにおけるふたつの遺跡の例が知られるだけである。それは Mehrgarh 第Ⅰ期〔Jarrige：1977；Jarrige：1979〕と Kili Gul Mohammad 第Ⅰ期〔Fairservis：1956〕である。

7時期の展開があとづけられる Mehrgarh（以下は MR と略す）において，最初の第Ⅰ期は無土器である。しかし，高度に発達した泥煉瓦家屋の中では，焼きしまった床面，円形の炉，腰かけ用の土台などが知られ，また，河原石製の碾き臼，フリントを主材料とした台形ないし半月状の細石刃，骨角器が大量に出土した。一方，栽培種の大麦や小麦，野生のナツメやナツメヤシも数多く検出され，多量の獣骨のなかには野生から家畜への移行を証するものがある〔Meadow：1980〕。西アジア最古の農耕文化にみられる文化要素がここにも見い出され，C－14年代測定によれば，前7000年代半ばに遡る。このことは，西アジアで初期農耕文化が開花したころ，バルチスタンにおいても定着農耕生活は既に始まっていたことを示している。

Kili Gul Mohammad（以下は KGM と略す）第Ⅰ期文化内容は，Mehrgarh 第Ⅰ期と共通点を多分にもち，「先土器新石器時代」に位置づけられている〔Allchin：1982〕。第Ⅰ期に属する5メートルの堆積層のうち，上層部から得られたC－14年代は前5000年代中ごろまで遡る。Kili Gul Mohammad 第Ⅰ期の C－14年代は堆積の上層部から資料採集したもので，Mehrgarh 第Ⅰ期と大きな差があるが，5メートルに達する堆積の下層部を考えて推算すると，その差はもっと縮まるのであろう。これら二つの農耕村落はいずれもインダス平野とイラン高原をつなぐ交通の要衝にあり，その後のバルチスタン全域における文化の展開に対して大きな意味をもつ。MR 第Ⅰ期と KGM 第Ⅰ期との文化は，のちに繁栄を極めるバルチスタン諸文化にとり，基礎的かつ中枢的な存在であり，バルチスタン初期農耕文化の基礎段階，すなわち，先土器新石器時代と考えてよい（図1）。

Ⅱ　Kili Gul Mohammad 期の設定――彩文土器の第一段階

バルチスタンで土器が出現したのは，Mehrgarh では第Ⅱ－B 期，Kili Gul Mohammad

KGM 式土器	胎土. 焼成	成　形	外　観	彩文	主 要 器 種
Nazim Hard	堅緻 貝粉	手づくね, 回転台	赤っぽい黄色	なし	厚器壁(外反, 直立)の鉢
Adam Sandy	砂粒 粗い	手づくね, 篭利用	浅い黄色 滑沢	なし	外反する器壁をもつ深鉢
Burj Basket Marked	堅緻 砂	手づくね, 篭利用	黄色 篭目	なし	厚い器壁をもつ深い大鉢
Mian Ghundai Fine Plain	細砂	ロクロ	褐色 赤色 滑沢	なし	小鉢, 杯, 小型
Kechi Beg Oxidized	堅緻 砂	手づくね, 回転台	赤スリップ 磨研	なし	口の開いた鉢
Black-on-Red Slip	堅緻 細砂	手づくね, ロクロ	赤スリップ 磨研	黒色	口の開いた鉢, 小口の壺
Coarse Black-on-Brown	堅緻 細砂	ロクロ	褐色 赤色 磨研	黒色	台脚, 台座を持つ壺, 鉢皿
Red Paint	砂粒 粗い	手づくね	黄褐色 滑沢	赤褐色	口の開いた鉢, 小口の壺

表1　Kili Ghl Mohammad 式土器

では第Ⅱ期である。最初の土器の様相を KGM 第Ⅱ～第Ⅲ期の土器を中心に検討する。

KGM 第Ⅱ期に始めて出現した土器は輪積手作りとロクロ成形を併用し，器形の面でもかなり複雑な構成を示している（表1）。日常生活の基本的な器種が揃っているばかりでなく，立派な彩文を使いこなして飾られた土器もある。無文土器のうち，特に「Burj Basket-Marked」とよばれる篭目文付きの土器（KGM 第Ⅲ式）が独特な存在として知られる。ところが，KGM 第Ⅰ期においても，MR 第Ⅰ期においてもこのような発達した土器が生産されるに至る過程は全くたどれないから，外部世界から持ち込まれたという説明は可能性が大きい。

次の KGM 第Ⅲ期に，これらの土器はピークに達した。そのうち，特に KGM Ⅵ式彩文土器の発展が著しい。彩文は黒褐色が主で，赤褐色も一部に認められ，赤いスリップの上か，土器に直接に施される。土器内面外面ともに施文の対象になるが，とりわけ，口縁部に沿って一本の広い横帯文を描くことを好んだ。文様の構成は複雑に見えるが，配置は比較的幼稚で，随意に器面に散開する。施文の規則をまだ習得せず，モデルを部分的に模倣する段階に留まる。最も典型的な基本構成単位は，図表1のごとく12種類であり，主に KGM 第Ⅲ期から第Ⅳ期の間に隆盛するこれらの文様を描いた彩文土器を「KGM」式彩文土器と呼び，共伴するすべての土器を KGM 式土器群としておく。

KGM 式土器群は KGM 遺跡にとどまらず，その周辺，そして北部バルチスタンから中部バルチスタン南部まで，広い範囲に及ぶ（図2）。注目すべき点は，この範囲にあ

る遺跡がKGM遺跡やMR遺跡と異なり，最初からKGM式土器を共伴する事実である。

中部バルチスタンのKalat-Surab地方にあるAnjira遺跡（以下はAJと略す）では〔de Cardi：1965〕が5期に分け，最初期の第Ⅰ期からKGM土器が存在する。第Ⅰ期と第Ⅱ期との土器はほぼ同じ性格を示し，成形法，色調，胎土成分をみると，KGM Ⅲ式，Ⅴ式，Ⅵ式，Ⅶ式，Ⅷ式が主体である。器形の面においては，口が開いた浅い，または深い平底鉢，器壁が直立し，胴部が膨らみ，口が締まる大型の甕などがある。KGM Ⅵ式と思われる土器のうち，短頸で，口縁部が大きく外反する甕のような器形がKGM遺跡に存在せず，圏足付きの土器もKGMでは珍しい。文様には出土例こそ少ないが，KGM式の文様2，4，6が存在するほか，土器の口縁部に愛用された粗い横帯文や波状線文などはKGMと共通するところである。

Siah-Damb（Anjiraの西26km，以下SDと略す）第Ⅰ期に属する極めて少量の土器片にも，KGM Ⅲ，Ⅵ，Ⅶ式土器が混在する。〔de Cardi：1965〕はAJ第Ⅱ期と平行するとみる。KGMと時期的な関係をもつことを示していよう。SD第Ⅱ期に土器は急速に複雑となる。ⅰ－ⅲ亜時期に分かれるが，ⅰ期に後述の「Togau式土器」と「Kechi Beg式土器」が登場する。一方，KGM式土器は依然として存続し，文様として1，3，4がある。

Togau式土器は，オレンジがかった赤色のスリップに，黒色で幾何学文様，動物と人物等を描き，焼成は良好，硬度が高い。ロクロ成形，赤スリップに黒彩すること及び一部の器形などの面では，KGM Ⅵ式土器と共通するが，文様構成には大差がある。幾何学文様において両者は峻別され，またKGM式文様のなかには動物文や人物文はない。従って，AJ第Ⅰ～第Ⅱ期にTogau式土器が存在しない事実やSDにおけるこの二式の土器の前後関係からみると，Togau式土器はKGM式土器より新しい。de CardiはTogau式文様に対して，動物の角文様を基準にしてA－D式の四つの段階を設定したが，KGM式文様にもそれとほぼ比較できる文様がある。すなわち，KGM式の文様7a－7dである（図表1）。そのうち，7a（Togau式Aにあたる）はKGM第Ⅲ期に属し，7a－7dはKGM第Ⅳ期以降のものと考えられる。それらの文様はこの時期の他の遺跡にも認められる。

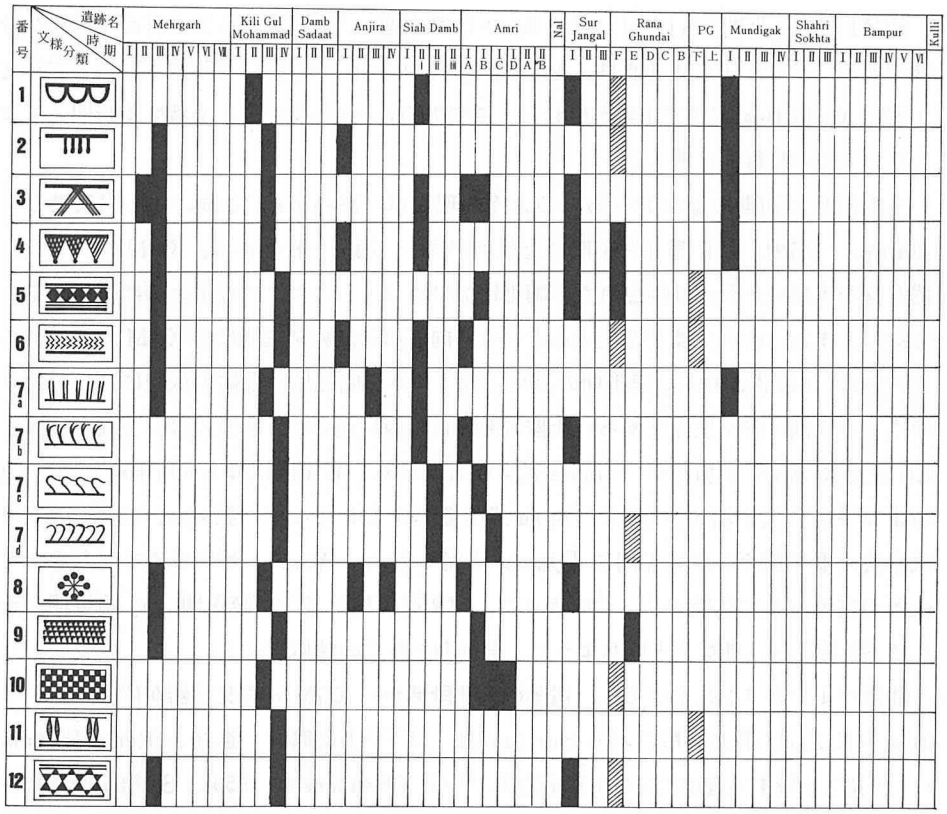
SD第Ⅱ－ⅱ期には，KGM式彩文土器がほとんど消えて，Togau式土器とKechi Beg式土器が主流になる。KGM第Ⅳ期に初現したKechi Beg式土器はSD第Ⅱ－ⅰ期ではTogau式土器とともに出現し，KGM第Ⅳ期以後にKGM彩文土器が消滅すると，Togau式文様を一部とりこみ，Quetta地方で代表的な存在となってゆく。これについてはつぎの章に詳述する。

KGM 第Ⅱ～Ⅲ期，AJ 第Ⅰ～第Ⅱ期，SD 第Ⅰ期は，KGM 式彩文土器が流行した段階である。次の，KGM 第Ⅳ期，AJ 第Ⅲ期，SD 第Ⅱ－ⅰ期は，新たに Togau 式彩文土器と Kechi Beg 式彩文土器が現われ，従来のKGM 式彩文土器と交替する時期，すなわち，一つの移行期と考える。

土器出現の初期段階におけるこのような現象は，Mehrgarh においても観察できる〔Jarrige：1979〕。MR 第Ⅱ－A 期に土器が初現し，第Ⅱ－B 期には，KGM Ⅳ，Ⅵ式土器を含む大量の土器が使用された。第Ⅲ期では手づくねとロクロ成形との比率が 3：7 となり，また，彩文土器が急増するという傾向がある。彩文構成には KGM 式 3，4，5，8，12などが確認される。第Ⅲ期の後半には，ロクロ成形品が全体の八割に達した。そのうちの 3 割は彩文土器である。土器の発展は頂点に達した。彩文には，上述のほかに，KGM 式 2，6，9 が加わり，Togau 式文様も現れる。第Ⅳ期には Kechi Beg 式の二色および多く彩文土器が登場し，Togau 式の要素をまじえながら発展し，次第に KGM 式彩文土器を駆逐し，第Ⅳ期に「Quetta 土器（Quetta Ware)」がはじめて現れるまで土器の主流として存続する。このように，MR 第Ⅳ期は KGM 第Ⅳ期，AJ 第Ⅲ期，そして SD 第Ⅱ－ⅰ期などと同じように，移行期としての性格をもつ。

北部バルチスタンにおいても，遺跡の最初段階から KGM 式彩文土器が伴出する。これは主に Zhob 川上流域にある Sur Jangal（以下 SJ と略す）遺跡と Rana Ghundai（以下 RG と略す）遺跡において確認されている〔Fairservis：1959〕。SJ 第Ⅰ期においては KGM Ⅶ，Ⅵ式彩文土器の存在が顕著で，器種構成は，口の開いた平底鉢，胴部が膨らんで口が締まった中，小の甕などを中心とする点，KGM のそれとにかよっている。しかし，そのほかに Jangal Dark Slip と Loralai coarse plain（LCP 土器と略す）という土器が存在する。前者は，KGM 第Ⅳ期に見られる Malik Dark Slip 土器と，また，後者は，胎土，焼成後の外見等から，KGM Ⅲ式土器と性格を同じくしていよう。

SJ 第Ⅰ期の上層部には，Loralai Striped（LS 土器と略す）と Jangal Painted（以下JP 土器とする）土器とが現われる。LS 土器は地肌色と色彩においては KGM Ⅵ式土器と似ているが，口縁部の黒彩横帯文から器内の中心点へと赤い線を均整に引いていること，二色を交互に使用することが大きな特徴であり，ナイフ状断面の口縁部を持ち，口の開いた平底鉢が最も典型的な器種である。この土器はもっぱら Zhob 川上流地域に限り，地域色が極めて強い。JP 土器は器表に黒彩でユニークな長い足の瘤牛の列を描く。それはかっていわゆる「ゾーブ文化」〔Piggott：1950〕の特徴と考えられた文様である。これらの極めて独特の彩文土器は，主に SJ 第Ⅱ期に流行したものである。とく



図表1　Kili Gul Mohammad 式彩文土器代表文様と各遺跡における出土状況

（PG は Periano Ghundai）

Kili Gul Mohammad 式彩文土器代表文様

文様分類	主　要　特　徴
KGM-1	大連弧文。曲が大きく，またがる幅がひろい。主に鉢類の内側に口縁沿いに施文。
KGM-2	口縁部にめぐらした横帯文から２－５本の棒状文を一組みに垂下(顔料が自然に垂れる観)。
KGM-3	大型甕類の，口縁沿いの横帯文と胴部をめぐる横帯文との間に描く平行線の山形文。
KGM-4	鉢類の口縁沿いの横帯文下方に並ぶように描く斜格子充塡の逆三角文。先端部に珠点文。
KGM-5	甕類の胴部の太い横帯文の間に連続して並ぶ塗り潰された菱形文。
KGM-6	シグマ文。二本の平行線の間に一列に配置する場合が多い。
KGM-7	動物（山羊）の角を表現する文様。４式にわけている（図7a-7d)。
KGM-8	ロゼット文。甕類に単独に描く。「＊」の形をし，それぞれ棒の先端に珠点文。
KGM-9	斜格子文を基本的構図とし，格子ごとに，その右上部を三角形に塗りつぶす。
KGM-10	市松文様。おもにほかの文様とくみあわせる。
KGM-11	斜線充塡の柳葉形文様。上下二本の線の間に，ペアとなって配置。
KGM-12	塗り潰した三角形六個が空白六角形を取り囲む基本構図,互いに組合わせて文様帯を構成。

にJP土器は，中部バルチスタンにおいてはKGM式土器の後を継ぐKechi Beg式土器の中に，ほぼ完全な一致を示す類例が見られる（後述）。SJ第Ⅱ期になると，KGM式彩文土器は殆ど消える。従って，いま，新しい土器の出現によって従来の土器が消滅し，次にあらたな傾向が定着するまでを一つの移行期とすると，SJ第Ⅰ期下層部はKGM第Ⅰ～第Ⅱ期に，上層部はKGM第Ⅳ期に比定できる。

Rana Ghundaiは，はじめ〔Ross：1946〕が5期に分け，〔Fairservis：1956〕が再調査をもとに6段階（下層からF，E，D，C，B，A）を設定した。FとE段階がここで問題とする段階である。F段階では，KGM Ⅶ式とⅧ式土器及びLCP土器が確認され，E段階の末まで続く。E段階の中では更にJP土器が現われて，D段階に本格的に流行する。KGM式彩文土器はE段階を最後に消滅する。E，F段階において，KGM式文様は，4，5，9を確実に認めうるが，他に表面採集として1，2，6，10などもある。RGにおけるKGM式彩文土器の存続期間を考慮すると，これらの表面採集はE，F段階のいずれかに属するものであろう。このように，E，F段階は，SJ第Ⅰ期と同じようにKGM第Ⅲ～Ⅳ期に平行するものである。E段階におけるJP土器の出現，JP土器とKechi Beg Ⅲ式土器との関係，そして，この段階の末におけるKGM式彩文土器の消滅を考慮して，これらの諸特徴はこの段階がKGM第Ⅳ期と同様な性格を持つ新旧の交替時期であることを示している。

Mundigak（以下MDGと略す）遺跡はバルチスタンの域外であるが，文化内容はバルチスタン諸文化と密接な関係にある。〔Casal：1961〕によると，第Ⅰ期は5段階に分かれる。段階1～3の土器は9割がロクロ成形により，口の開いた平底鉢，器壁が直立し，あるいは外弯する甕などが主要な器種で，KGM式土器の器種構成にほぼ一致する。一方，赤色スリップの上の黒彩文は，KGM式彩文土器とみてよい。段階4に入ると，Kechi Beg Ⅰ式文様を二色ないし多色で描いた土器が現われて時期の転換を予告し，KGM式彩文土器は段階5をへて，この遺跡の停滞期である第Ⅱ期に入るまで残存している。段階1～3がKGM第Ⅱ～Ⅲ期に，段階4～5がKGM第Ⅳ期に平行することは明らかである。

中部，北部バルチスタンにおけるKGM式土器の存続，盛行はここであきらかにしたとおりだが，この時期における南部バルチスタンでは，KGM式土器ほどの古い土器は確認されていない。

土器生産がバルチスタンで始まってから，新しい彩文土器が現われるまで，一部に地域色がありながらも，KGM式土器分布圏の存在は明らかであり，KGM式彩文土器は

一つの時代の主流であった。KGM 第Ⅱ～Ⅳ期の彩文土器によって特徴づけられた文化に対し，土器の上で「Kili Gul Mohammad 期」を設定する。

Ⅲ　Kechi Beg 期の設定――彩文土器の第二段階

KGM 式彩文土器の衰退につづいて登場したのが Kechi Beg 式彩文土器（以下 KB 式と略す）であることは既に触れた。KB 式彩文土器は単色，二色，多色など，さまざまな色彩で鮮やかに土器を飾るのみならず，文様構成もまた KGM 式彩文土器とはほぼ完全に異質である。

KGM 第Ⅳ期における交替以後，KB 式彩文土器がしだいに主流になったことは，Kechi Beg 遺跡自身と Damb Sadaat（以下 DS と略す）遺跡第Ⅰ期にて認められた。〔Fairservis：1956〕の分類に従い，KB 式彩文土器とそれに伴う主要な土器及びその主な特徴を表 2 に示した。文様の多様性と器種構成とにおいて，KGM 時期とは大きな隔たりが認められる。台脚付き土器が一段と増加し，高い台脚を持つ杯，球状胴部をもつ壺など複雑な器形が作られ，製陶技術もまた進展した。また文様をKGM 式に照らすと，両者の間に継承関係は殆どみられない。構図でも，KGM 式では，構成が自由で，施文部位が一定していないのに対して，KB 式文様はかならずモチーフを組み入れた横帯文を主体とし，土器の適切な箇所に施し，いわば，文様の定型化をはかる傾向が認められる（図表 2）。この事実は，KGM 式文様と KB 式文様との間には時代の差ばかりでなく，由来の上でも相異があることを示唆している。一方，KG 第Ⅳ期以降に KGM 式彩文土器と篭文付き土器はほとんど消えるが，無文土器は何ら変化なく前代から存続している。建築，石器，骨角器など，土器以外の文化要素にも顕著な変化がない。文化の断絶の可能性は考えがたい。新しい土器生産技術の導入によって，土器の流行をかえて，ついに土器生産の新段階が生み出されるようになったのであろう。極めて複雑なものと思われるその過程を現段階で究明するのには制約が多く，ここでは議論を控えて，今後の課題とする。

Kalat地方（中部バルチスタン）において，Kili Gul Mohammad 期以後，KB 式土器が後を継いだことはその特有な多く彩文土器の存在が証明する。SD 第Ⅱ－ⅰ期に既に登場した「Zari Ware」が KB Ⅰ，Ⅱ 式土器の特徴を兼ねているからである。器表に赤褐色と黒と白の三色を混用したもの，単に暗黒スリップの上に白彩を施したものも認められる。この期の文様のなかには，KB 式彩文の典型 1，2，4，7，8，13，14，等がある。SD 第Ⅱ－ⅱ期には，Togau 式土器とともに，やや地域色を帯びたKB 式彩文土器が存

Kechi Beg 式土器	胎土	成形	外観	彩文色彩	主要器種
Polychrome	良質	ロクロ	黄褐色　器壁薄く堅い	赤，黒色	鉢，(大小)深鉢，小口壺
White-on-Dark Slip	良質	ロクロ	褐色　黒色スリップ	白色	鉢，深鉢，高台脚の器種
Black-on-Buff Slip	良質	ロクロ	鈍黄色スリップ	黒色	鉢，小口鉢，小口壺
Red Paint	砂	ロクロ	黄褐色　磨研	赤色	鉢，皿，小口壺
Spezand Black & Red Rim	良質	ロクロ	浅黄色　口縁内側彩文	赤　黒色	深鉢，皿
Mian Ghundai Dark Rim	細	ロクロ	浅黄色　口縁内外彩文	暗黒色	鉢，小口壺
Malik Drak Slip	細	ロクロ	浅黄色　暗黒スリップ	なし	鉢，小口，直立器壁の壺
Wari Sand & Gravel Temper	木炭粒	手づくね	深黄色　表面粗い	なし	直立器壁をもつ大平底壺
Mustafa Temper	砂	ロクロ	浅 深黄色 表面粗い	なし	球状胴をもつ鉢
Kechi Beg Wet	細	ロクロ	黄色　一部スリップ	押捺装飾	小口で大型の甕
Quetta Micaceous	雲母粉	ロクロ	赤っぽく一部スリップ	なし	口の開いた鉢
Sirdar Coarse Buff	砂	ロクロ	浅黄色　磨研	なし	口の開いた鉢
Khojak Parallel Striated	砂	ロクロ	黄褐色　表面スリップ	押捺装飾	小口で大型の甕
Sultan Purpie	砂	ロクロ	鈍黄，紫色スリップ	なし	小口で胴張りの深鉢

表2　Kechi Beg 式土器

続する。種類もさまざまで，「Zari Ware」，鈍黄色地黒彩土器，二色土器，また多彩文土器が見られる。これを〔de Cardi：1965〕は Amri-Kechi Beg 土器とする。彩文には KB 式 4 , 12, 13, 14, 15, 19, 20などが確認されている。だが，この時期の彩文土器は，SD 遺跡の地理上の位置によって，中部バルチスタンばかりでなく，Nal 式やAmri 式土器という南部バルチスタンの影響をも受け，地元独特の無文土器「Anjira Ware」も加わり，土器全体の様相は多様化を極めている。SD 第Ⅱ－Ⅲ期に入ると，南部バルチスタンからの影響はなお顕在化し，特に Nal 式土器の要素の増加が著しい。

Nal 川とNundara川流域に展開している Nal 式土器は，Kechi Beg 式と同じく，多彩文土器を特徴とする土器群である〔Hargreaves：1929 ; Stein：1931〕。器種構成は他の土器群と一目で識別されうるほど独自性が強く，自らの系譜をもっている。KB 式多彩文土器と異なり，Nal 式の多彩文土器は白スリップをかけた鈍黄色土器で，茶褐色または，黒色で文様を描く。まれに焼成ののちに赤，青，黄と緑などの色彩を施す。文様は，

複線で構成することを最大の特徴とし，ほかに，滑らかな曲線で描いた環状文つなぎの横帯文，小さい階段状文，オメガ状文などが基本構成である。また，高度に様式化された動物文（魚，牛，犬，豹，山羊）と植物（草，菩提樹葉文等）なども，Nal式土器を特徴づける。このようなNal式土器の浸透により，SD第Ⅱ－ⅲ期では，土器文様の混用が激しいが，KB式4，5，18，19，20，21などは依然としてある。一方，KB式土器要素が薄らいだAJ第Ⅳ期に入ると，Nal式彩文土器はここで大勢を占める。中部バルチスタンの南部におけるこの時期にKB式彩文土器の衰退とNal式彩文土器の成長という傾向が顕著である。こうして南部バルチスタンの農耕文化の発展の一端がうかがわれる。

さて，この時期に南バルチスタンで勢力を得たもう一つ別の土器群は，インダス平野に近い低丘陵地帯に分布しているAmri式土器である〔Casal：1964〕。Amri遺跡第Ⅰ期A－D4段階のうち，ここで検討を要するのは最後のD段階を除く3段階である。

この第Ⅰ期の土器は，主に赤色ないしピンク色，または鈍黄色のスリップをかけた，黒彩文の土器が主流である。手づくねとロクロ成形のものが共存し，焼成は良好，固く薄い。器種構成は（1）口のひらいた鉢，（2）ラッパ状高台脚付きの鉢，（3）外反または直立の口縁部をもち，長い胴が緩やかに膨らむ大きな甕，（4）Amri遺跡で最も特徴的な器種―大口で球状胴をもつゴブレットである。

Amri第Ⅰ－A期の文様はAmri独自のものを除くと，KB式文様とのつながりが強く，特にKB式4の連続斜線充塡菱型文，9の綾杉文及び10の矢羽根状文などが基本的な構成として盛んにあらわれる。また，Amriに特有な文様を除いて，KGM式3，6，10の文様要素とTogau式の角文様にCに相当する文様も混在している。

Amri第Ⅰ－B期には，KB式4，8，9，17が存続するとともに，KGM式5，9，10なども残る。特に5，10式文様は以後にもAmriで愛用されたものである。また，Togau C式角文様の変形とD式角文様も見られる。

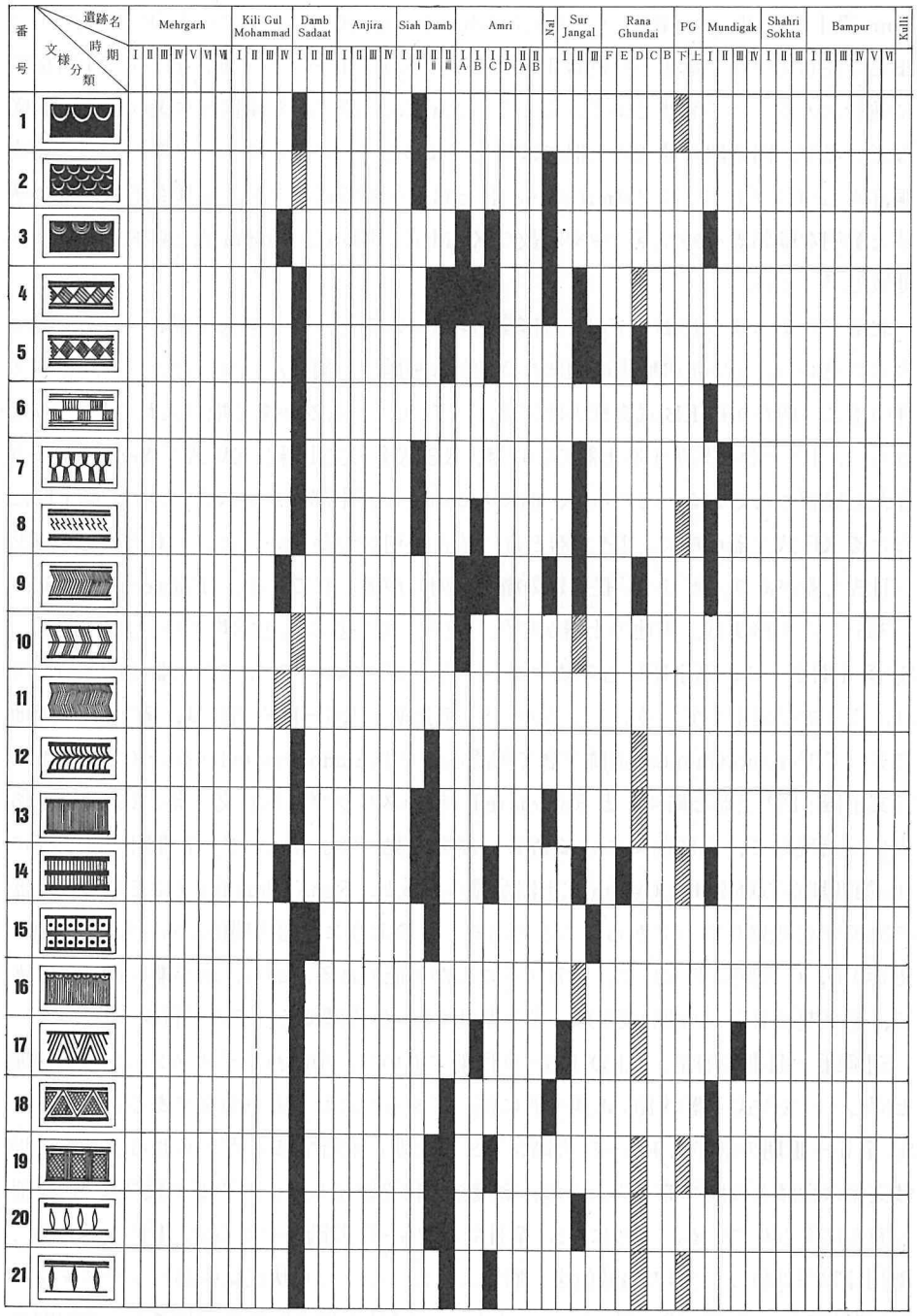
Amri文化の最盛期である第Ⅰ－C期には，ピンク色の器表に黒，白，赤，茶色とオレンジ色などを施した多彩の土器が出現し，Nal式彩文土器との関連を思わせ，動物文も登場した。またAmriにおける最も特徴的な施文（市松文様を充塡したパネルを中心に文様配置を行う）がこの段階にはいって一層盛んになった。一方KB式文様要素も依然として好まれ，3，4，5，9，14，19，21がみられる。しかし，Togau式文様とKGM式文様はほとんど消滅した。

以上の文様関係からみると，Amri第Ⅰ－A期からB期までは，KGM式，KB式，Togau式の文様要素がAmri式文様要素と共伴し，KGM第Ⅳ期と同じ状況下にある。

Amri 第Ⅰ－D 期には，新しい文様要素である Quetta 式が混入してくるので，これがいまだ存在していない第Ⅰ－C 期は DS 第Ⅰ期や SD 第Ⅱ－ⅰ～ⅱ期，そして AJ 第Ⅲ期に並行とみることが妥当である。しかし，Amri 式土器は，外見良好な焼成，薄い器壁などの点で，同時期の他式の土器には類をみないものである。ユニークな，大口で球状胴部をもつゴブレットは「Amri 式」と名を冠すべき型式であり，文様もまた独自な構成と鮮明な輪郭線を持つ点，やや粗放な KGM 式，KB 式，Togau 式とは対照的であり，地域色がつよい。

北部バルチスタンにおいては，SJ 第Ⅱ期にはいると，第Ⅰ期末に現れた JP 土器が大きく発展し，長い足の瘤牛の列と言う独特な構図が一層盛んになった。一方，その文様の中には明らかに KB 式文様の要素 4，5，7，8，9，14，20が多く取り入れられている。さらに，JP 土器と共伴する土器の中には，KB 式多彩文土器と XV 式（Wet Ware）の存在も確認されている。ところで，前にもふれたが，中部バルチスタンの DS 第Ⅰ期における KB 式土器の中に，JP 土器とは「殆ど区別がつかない」といわれるほどの KB－Ⅲ式土器があり，同じく「長い足の瘤牛の列」が描かれている。〔Fairservis：1959, p. 365〕。この事実は，両地の土器が年代上並行していることを示唆する。JP 土器は，SJ 第Ⅱ期をへて，第Ⅲ期にも存続する。一方，RG においては，JP 土器はE 段階に現れ，C までに集中している。ところが，SJ 第Ⅲ期と RG－D 段階には，RG と SJ 両地において Periano Ghundai 遺跡下層で確認された Periano Painted（赤いスリップ地黒彩文土器；PP 土器と略す）と Red on red（赤いスリップ地赤彩文土器；RG. RR と略す）が出現して，土器面における新しい展開を見せる。また，SJ 第Ⅲ期には，既に DS 第Ⅱ期から登場する Quetta 式土器が見られるが，Rana Ghundai ではそれらの土器の出現は C 段階になってからのことである。このような土器の関係から，SJ 第Ⅲ期は RG の D，C 段階に照らして，二分することが可能である。即ち，前半期と後半期であり，前半期は RG－D 段階後半に，後半期は RG－C 段階にそれぞれ並行する。

SJ 第Ⅱ～Ⅲ期の前半，および RG－D 段階において，中部バルチスタンにおける展開と同じく，KB 式土器が KGM 式土器に続いてあらわれたことは事実である。従って，SJ 第Ⅱ～Ⅲ期の前半と RG－D 段階は DS 第Ⅰ期と並行すると考えられる。一方，地域文化の台頭を反映するかのように，高度な技術を駆使して，鮮やかで独特な JP 土器も盛んに作られている。さらに，SJ 第Ⅲ期と RG－D 段階後半からは，PP 土器とRG. RR土器が登場し，土器の地域色を一層つよめた。そうした状況は中部バルチスタンの SD 遺跡における KB 式土器―Togau 式土器―AJ 式土器の関係に比較でき，地域間に



図表 2　Kechi Beg 式彩文土器代表文様と各遺跡における出土状況

（PG は Periano Ghundai）

Kechi Beg 式彩文土器代表文様

文様分類	主　要　特　徴
KB-1	大連弧文。鉢，甕類の暗黒スリップがけに白彩施文。
KB-2	魚鱗状文。暗黒スリップをかけた鉢類に白彩描。
KB-3	多重連弧文。白彩，黒彩で二，三の半円弧を重ねるように描く。
KB-4	斜線充塡の菱形文様帯。上下にそれぞれ二，三本の平行線に夾まれた間に横列に配置。黒，多色。
KB-5	格子充塡の菱形文様帯。構図はKB-4と同じ。
KB-6	上下にそれぞれ二，三本線の間に，真中の線を軸に四，五本の縦線を一組に上と下とずれて施す。
KB-7	構図はKB-6と似る。真中の線と上下の縦線がややほそく，波打つ。
KB-8	二本の太い線の間二，「*N*」形文様を一列に描く。
KB-9	上下の横線の間に，綾杉文様が横向きに施される。
KB-10	構図はKB-9とよく似る。綾杉文の真中に太い線をいれて，全体として矢羽根状になる。
KB-11	上下二本の太い線の間に，縦方向の曲線文を密に描き込む。
KB-12	上下二本の太い線の間に，「人」字を横転させ，重ねて並べるように描く。
KB-13	縦細線帯文。二本の太い線の間に，細い縦線が密にはいる。
KB-14	梯子文。構図上KB-13に近いが，縦線がより太く，線間距離もより広い。間を横線が何本か横切る。
KB-15	上下の太い線の間，四，五本の横線を真中に上下の空間を縦線で小正方形に区切り，珠点を入れる。
KB-16	花びらの中に珠点をもつ花づな文様が上にあり，その下に沿い縦線を密に引く。
KB-17	二本の太い線の間に，平行線で山形文様を描く。
KB-18	二本の太い線の間に，斜格子充塡の三角形文が互いに細線一本を隔てて上下からはめ込む形。
KB-19	二本の太い線の間を，三，四本を単位とする細い縦線で区画し，できたパネルを斜格子で埋める。
KB-20	柳葉状文。描き方は随意的である。
KB-21	斜線充塡の柳葉状文。

共通した傾向があることは意味深い。

次にMundigak遺跡を見ると，KB式土器は，MDG第Ⅰ－4期に現われ，第Ⅰ－5期からⅡ期にわたって認められる。浅鉢，厚い口縁部をもち，暗黒スリップを口縁部以下の内外面ともにかけた深鉢などがある。いずれもKB式土器に頻出する型式である。文様要素は，KB式3，6，8，9，14，18，19などが確認できる。なお，KB式文様19を描いた多彩文土器の破片も出土している。MDG第Ⅱ期にはKB式文様7がみられ，器種の面において，KB式土器のほかにSistan地方の土器が少量と，Quetta式土器が混在し，過渡期的な様相を呈する。さきにMDG第Ⅰ－4～第Ⅰ－5段階がKGM第Ⅳ期と同時期であることをのべた。ここでMDG第Ⅰ－5期から第Ⅱ期末までの時期をKB式土器が流行したDS－Ⅰ期に並行するとみておく。

土器の様相からみてMR第Ⅳ期はKGM第Ⅳ期に時期的に並行すると認められている。また，MR第Ⅴ期には多彩文土器やZari式土器，そしてKB式文様等が依然として存在する。しかし，Quetta式土器はまだ現われていない。そこでMR第Ⅴ期もDS第Ⅰ期と並行すると考えることが適切である。

以上，各遺跡において，KGM式彩文土器についで，KB式彩文土器の要素がひろく存在することが確認された。一方，Quetta地方を除く各地方において，Togau式土器，Amri式土器，Nal式土器，Anjira式土器及びJP式，PP式，RG. RR式土器がKG式要素とともに，単独あるいはそれらが組み合わさって現われ，土器の地域色が強くなる。この動きは，Quetta地方から各地域へと波及する。このあり方は前代の基盤（KGM式土器圏）の上に成立したものであろう。Quetta地方の地理上の位置が大きくこのあり方に影響したはずである。この地方は他地域にさきがけて，MR第Ⅰ期やKGM第Ⅰ期の文化が存在した。この基盤の上に外部からの文化を受け入れ，周辺地域に波及させ，各地におけるあらたな文化の生成を促したことは十分に考えられる。しかし，KGM式土器圏はこの段階には既に解消した。土器の地域色が進み，KB式土器圏という単一の文化圏ではとらえられない。そこで，KB式彩文土器の要素の存続期間を一つの年代の尺度とすれば，同期間内に流行したすべての土器を一括した上で，この段階をKechi Beg期とよぶことができよう（図3）。

Ⅳ　Quetta期の設定――彩文土器展開の第三段階

Kechi Beg期以降のバルチスタンにおける土器の様相は，新しい土器のグループで代表される。「Quetta Ware」と「Faiz Mohammad Grey Ware」である。前者は鈍黄色の

地肌で，クリーム色のスリップをかけた上で，黒色か，茶褐色の顔料で彩文する。後者は灰色の地肌をもち，その上に黒色や赤色もしくは紫がかった黒色の文様を施す。この両者の関係をめぐって様々な論議がある。〔曾野：1974〕は，文様構成や共伴関係等からみて，後者は前者の一部だとする。Quetta 地方において DS 第Ⅰ～第Ⅲ期に存続した Quetta Ware（QW 式土器と略す）を中心とする新しい土器の一群は，7種類である。(表3)。しかし，QW 式土器は，その極めて複雑で鮮やかな文様構成に対して検討が加えられるべきである。〔Fairservis：1956〕は文様を18種にわけ，〔曾野：1974〕はこれを批判の上，再分類を行った。だが，これらの分類にはなお問題が残る。ここでは，図表3に示したように文様を細かい構成要素に分解し再分類しておく。

この QW 式文様の構成は大きく二つの基本要素に分かれる。その第一要素は，洗練された細線（斜線か，縦線か，平行線など）と格子文で埋めた幾何学文様と植物文様とである。第二の要素は，塗り潰しと塗り残しとの巧みな組み合わせによって構成された幾何学文様と動植物文様とである。曾野はこの二つの要素の流行時期にずれを認めた。前者は DS 第Ⅱ期に減少する傾向があり，後者は DS 第Ⅱ～第Ⅲ期にわたって続いていたという。この当否を検証することは現段階では難しい。しかし，QW 式彩文土器と最も強い共通点をもつ Namazga 第Ⅲ期（南トルクメニア）の土器文様には，前者との共通点が殆ど見られない。このことから，少なくとも両者の間に彩文の表現方法における出自の違いがあることは考えられよう。

QW 式土器群が大勢を占めたあとでも，Kili Gul Mohammad 期以来の無文土器の大多数は依然として存続している。そして，QW 式文様の中にも KB 式文様からの継承が見出されるばかりでなく，KGM 式文様の名残りさえも認められる。このことは，新しい土器群が到来しても，従来の在地文化が質的な変化を迫られることなく，安定持続した事実を示すものである。

QW 式土器の出自にまつわる推測の中で，南トルクメニアの Namazga 第Ⅲ期文化との関連が最も有力視されている〔Biscione：1973〕。確かに，バルチスタンにおいて南より北の地域にはるかに QW 式土器の要素が濃厚に見受けられる。このことが QW 式土器の伝入の地理的方向を示唆するかどうかはいま別にして，QW 式土器要素の存在を地理的に検討してゆきたい。

Sistan 地方の Shahr-i-Sokhta（以下 SS と略す）〔Tosi：1968；Tosi：1969〕第Ⅰ期の土器は，ロクロによる鈍黄色土器が大部分を占め，一部に灰色土器があり，QW 式土器群の組成と基本的に一致している。器種は，口の開いた深鉢，浅皿，甕と，胴が軽く

Quetta 式土器	土	成形	外観	彩文色彩	主要器種
Quetta Black-on-Buff	細	ロクロ	鈍黄色スリップ．磨研	黒色	鉢　壺　皿　台脚台座
Faiz Mohammad Gray Ware	細	ロクロ	灰色．滑沢	黒　赤色	浅鉢　台脚付皿　小口壺
QW Red-Brown-on-Dark Slip	細	ロクロ	褐色スリップ．暗黒	赤　褐色	浅鉢　皿　小口壺
Sadaat Single Line	細砂	ロクロ	浅黄色スリップ．赤	黒色	小口壺（口縁やや外反）
Mian Ghundai Buff Slip	細	ロクロ	薄い鈍黄色スリップ	なし	口の開いた鉢
Mian Ghundai Buff Plain	細砂	ロクロ	鈍黄色，滑沢	なし	杯．胴張り台座付き壺
Quetta Wet	砂	ロクロ	器表外側鈍黄スリップ	押捺装飾	小口．胴張りの甕

表3　Quetta 式土器

張ったゴブレットなどで，これらはQW式土器の基本形態でもあるが，他に地域色を示す独特な鉢と甕もみられる。彩文土器はQW式のように，黒色か，赤褐色で施文される。そのうちで，特に塗り潰しと塗り残しの手法による構図は多いけれども，QW式彩文構成における「第一要素」はきわめてまれである。QW式文様にいいかえると，Q1，2，5，8，9，13, 16, 20, 23, 24, 26, 28, 32, 34などがみとめられる。特にQ32のような市松文や斜格子充塡の菱形文が好まれたように見える。

SS第Ⅱ期は，村落から町邑へ移行する時期で，土器もこれに対応して急速な変化が現われている。前述の地域色の強い鉢と甕がふえ，ビーカー型土器が出現する。胴部が細長く，下半部が膨らみ，緩やかに締まった頸部と外反する口縁部をもつ。一方，文様も大きく変る。QW式文様要素が急激に減少し，上下両縁に小鋸歯文が付いた帯状文や，平行粗線波状文および斜格子文充塡で太い枠をもつ菱形文などを中心とする構成になる。SS第Ⅱ期と第Ⅲ期との土器の中には，Bampur地方先史文化の第Ⅲ～第Ⅳ期に流行した独特な黒色彩文灰色土器と赤色磨研土器との要素が混在している。しかし，Quetta地方におけるDS第Ⅱ～第Ⅲ期の土器は，SS第Ⅱ～第Ⅲ期の土器とは関連が極めて薄い。両地方の関係はMundigak遺跡の土器の様相を観察することによって，明確になる。

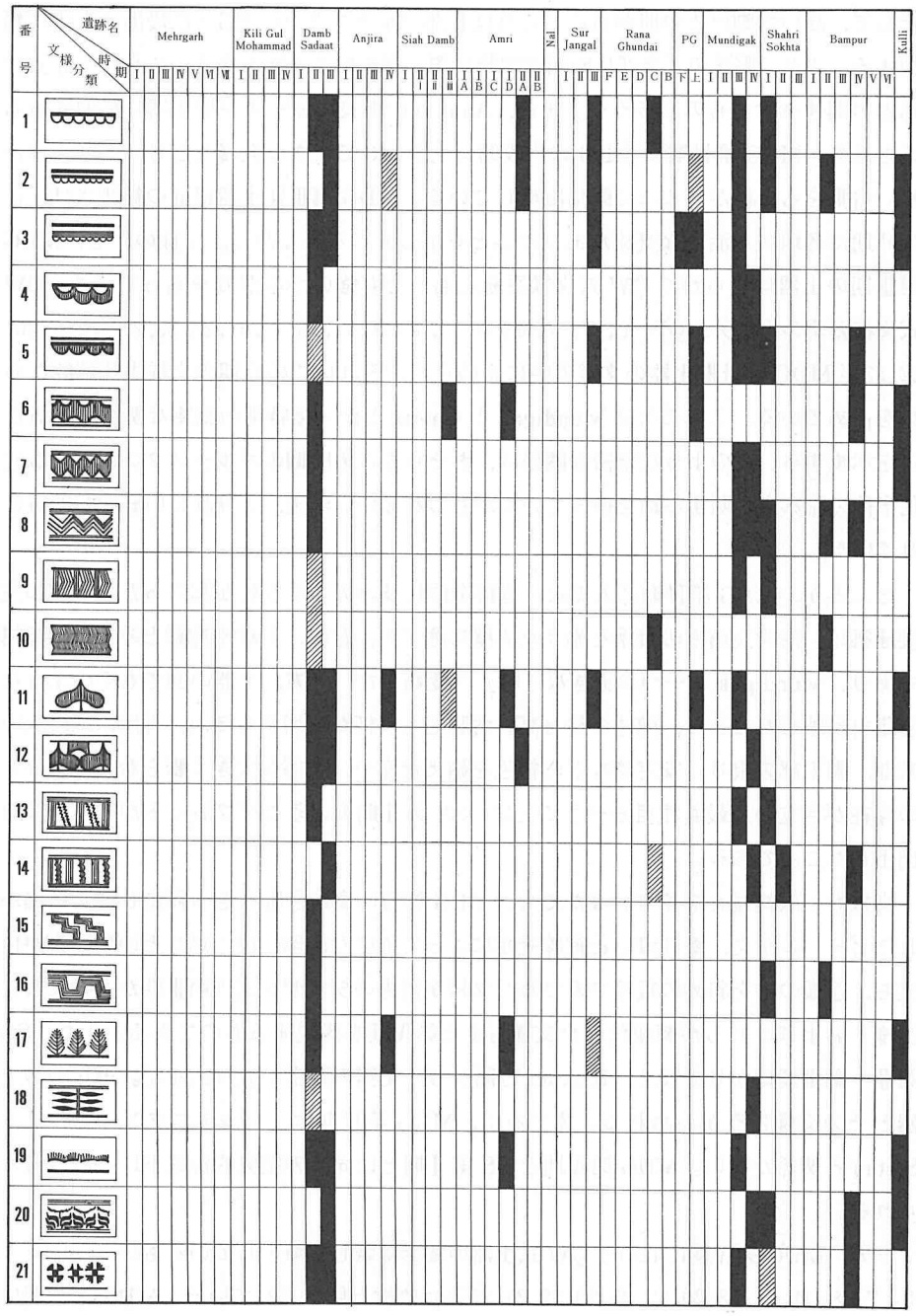
Mundigakでは，第Ⅲ期になると，QW式彩文土器の要素が急速に顕在化する。土器の様相は，QW式土器の様相よりはるかに複雑である。まず，QW式土器の主要な器種であるビーカーと口の開いた鉢とがみられる。また，SS第Ⅰ期に特有な鉢と甕もある。

そして，高い台脚付きの皿がある。これは北部バルチスタンのRG－C段階のものに類似する。また，胴体の下半部に断面が明瞭な龍骨形を呈する鉢がある。これはNal式土器との関連を示すものであろう。また，Amri式の細長いビーカー型土器に酷似するものもある。MDG第Ⅳ期にMDGの代表的な土器として大きな発展をとげる一種の鉢と高い台脚をもつ杯が，ここに既に出現している。MDG第Ⅲ期土器構成の複雑さは，この時期に各地域と活発な交流があったことを示している。しかし，文様の上で，MDG第Ⅲ期の土器は明らかにQW式文様系統ともっとも強いつながりをもっている。QW式文様要素の大部分，QW 1，2，3，4，5，7，8，9，11，13，19，21，22，23，24，25，27，30，32，33がMDG第Ⅲ期土器の文様の中に認められ，それはこの時期の文様中圧倒的な多数を占めている。このことはMundigakとQuettaとが一種特別の緊密な関係にあることを示唆する。このような緊密な関係は，おそらくこの時期のバルチスタンにおける文化全体の流れを解明する鍵を握っているかもしれない。今後，より詳しい研究が期待されている。

ところが，MDG第Ⅳ期に入ると，遺跡全体に及ぶ大きな変化が起こった。遺跡の主要建築は，泥煉瓦積みの稜堡を備えた周壁に囲まれ，倉庫，宮殿や神殿とみられる遺構もあり，Mundigakは一つの大きな「町」へ変わった。一方，土器の面でもそのような変化を反映したごとく，前述の鉢と高い台脚をもつ杯が急増するほか，外反口縁，太い頸部，胴下部の張り，安定感などの特色を備えた壺や，胴部が大きく膨らむ大型甕などの存在が目立つ。最も注目すべきことは，SS第Ⅱ期のようなゴブレットがここで多数出土したことである。

文様も一層複雑さを増す。なかでも，MDG特有の高い台脚をもつ杯にしばしば描かれたピーパル葉文，塗り潰しと縦線充塡によって描いた山羊，虎，鳥などの動物文が目立ち，連弧の中を斜めの複線でみたした文様が複線のジグザグ文（第Ⅲ期から好まれた文様）およびこれらが簡便化した文様もまた第Ⅳ期を代表するものである。また，SS第Ⅱ～第Ⅲ期ばかりでなく，Bampur方面からも土器の要素が流れ込んだ。第Ⅳ期の土器とその文様にうかがわれる。要するに，MDG第Ⅳ期は，バルチスタンではなく，Sistanと関係が深い。MDG第Ⅳ期とSS第Ⅱ期とは同質の歴史的背景下にあると考えられる。

一方，MDG第Ⅳ期においてQW式土器の要素は著しく減少しているものの，QW 4，5，7，8，12，14，18，20，22，25，29，32，34，35等は依然と用いられている。MDG第Ⅳ期にあらわれたピーパル葉文様，また塗り潰しと縦線充塡による動物文様は，ほぼ同時期の

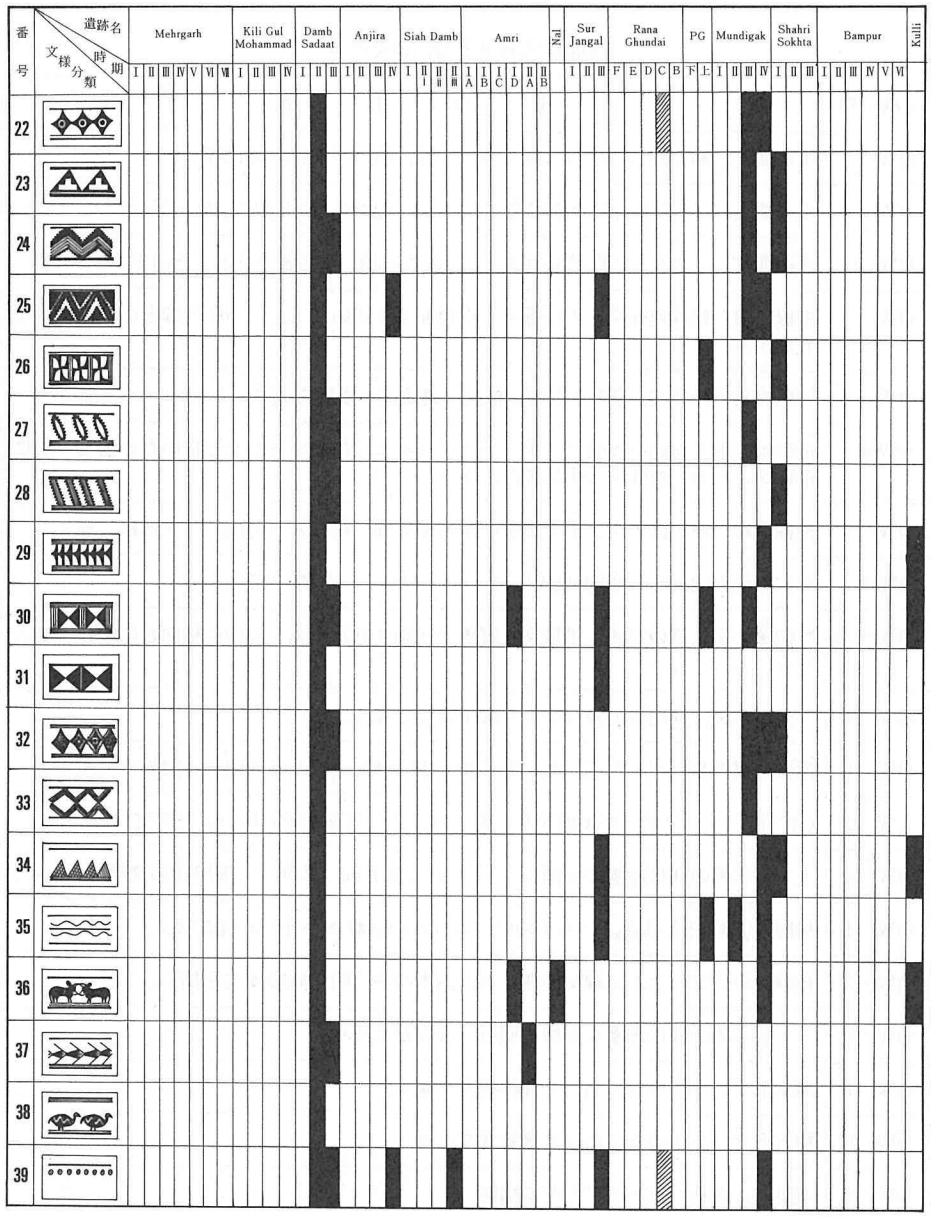


図表 3(a) Quetta 式彩文土器代表文様と各遺跡における出土状況

(PG は Periano Ghundai)

Quetta 式彩文土器代表文様(a)

文様分類	主　要　特　徴
QW-1	中連弧文。KGM-1，KB-1より小さい。鉢，皿類の口縁内外に描く。
QW-2	小連弧文。二本の平行した横帯文の下に沿い花綱のように描く。施文部分は1と同じ。
QW-3	小連弧文。一本の太い横帯文の下方に，数本の細い平行線があり，その下に沿い施す。
QW-4	縦線充填の複線連弧文。太い線で二重連弧文を描いた上，その線と線との間に縦線を充填する。
QW-5	縦線充填の連弧文。QW-1と同じ構図の連弧文に縦線を充填する。
QW-6	縦線地に上下対向の連弧文。上と下とずれるように向いあわせて描いた連弧文の間に縦線をいれる。連弧文の中は空白とする。
QW-7	縦線充填の連続山形文。上下数本の平行線の間に縦線入りの山形文を連続に描く。
QW-8	複線連続の山形文。構図はQW-7とかわらないが，複線で描く。
QW-9	断続綾形文入りのパネル横帯文。縦線で区画されたパネルの中に横向きの綾杉文を入れる。
QW-10	二列綾杉文。横向きの綾杉が上下に平行して並ぶ。
QW-11	縦線充填のピーパル葉文。太い外輪線で描いたピーパル葉の内側を縦線で充填する。
QW-12	QW-11のようなピーパル葉文を並列させ，その間を縦線充填の魚尾状文でつなぐ。
QW-13	上下数本線の間に縦線で区画したパネルに，斜方向に並列する階段状の文様を入れる。
QW-14	構図はQW-15と共通。パネルの中に入れるのは数本平行する縦波状文。
QW-15	複線階段状文。上下の線文の間に三，四本の平行線で階段状文を描く。
QW-16	上下数本線の間に細密な複線を屈折させながら描く。
QW-17	樹木形文。一本の幹に沿って綾杉状文を施す。
QW-18	樹木形文。一本の幹に沿って柳葉状文を施す。
QW-19	双葉文。櫛状の葉がペアとなる構図。
QW-20	若葉状文。上下の横線の間に，草地に芽生えた細長い葉をもつ植物を表す。
QW-21	花弁文。花芯にあたる部分はいずれも正方形になり，花びらの形が変化に富む。



図表 3(b) Quetta 式彩文土器代表文様と各遺跡における出土状況

(PG は Periano Ghundai)

Quetta 式彩文土器代表文様(b)

文様分類	主　要　特　徴
QW-22	菱形の中心に一つの円点をいれ，それをめぐって一周の空白を残し，塗りつぶす。
QW-23	三角形文の中心に逆「T」字の形の空白をつくって塗り潰す。
QW-24	複線で描いた山形文の上下に沿って塗りつぶしの小段階文を施す。
QW-25	構図はQW-24と同じである。複線を使わず，塗りつぶしの小段階文だけによって構成される山形文。
QW-26	縦線と横線とに区画される枠の中に変形したマンジ形を書きこみ，一つのパネルとする。
QW-27	中心に楕円形の空白を囲むように，歯先が外向けした鋸歯文を描く。
QW-28	鋸歯文付きの斜方向線文。数本の斜線を軸に両縁に鋸歯文が付く。
QW-29	塗りつぶした三角形がその一つの角が右に向くように並列する。
QW-30	上下数本の横線の間を縦線でパネルに区切り，その中に塗りつぶした二つの三角形を向かわせる。
QW-31	構図はQW-30に近いが，縦線で区切ることなく，互いに接して配置する。
QW-32	塗り潰した部分と残された空白とによって構成される菱形文。空白の中に変化に富む文様を描く。
QW-33	太い軸をはさんで，二本の細いジグザグ線を配置。
QW-34	斜格子入りの大鋸歯文。歯先が上に向く鋸歯状文の内側に斜格子を充填。
QW-35	一本の横線を中軸に，上下各一本の波状文。
QW-36	瘤牛文。胴部のみに平行線を書いて塗りつぶす。
QW-37	魚列文。頭と尾とを結ぶ魚を並べることによって，文様帯が構成される。単独の例もある。
QW-38	鳥文。塗りつぶしと塗りのこしによるものと，斜格子入りのものとがある。
QW-39	同心円スタンプ文。おもに QW-Ⅶ式(Quetta Circle Stamped)土器の頸部を一周する。

バルチスタンで広く見られ，Mundigak から中部バルチスタン（DS 第Ⅲ期）をへて南部バルチスタン（Nal 及び Kulli），そしてインダス平野に近い低丘陵地帯（Amri 第Ⅰ－D 期）に及んでいる。また一種の縞文様を飾ったテラコッタ瘤牛像も各地で作られ，MDG 第Ⅳ期，DS 第Ⅲ期，Periano Ghundai 上層部，MR 第Ⅵ期，Nal 墓地上層，Amri 及び Kulli などにおいて，その存在が確認された。なお，MDG 第Ⅳ期には，いわゆる「ゾーブ女神像」が出土したが，その類例は RG-C，SJ 第Ⅲ期，DS 第Ⅲ期，MR 第Ⅶ期，Kulli などにも見られる。以上述べた三種の要素は，バルチスタン全域にわたる Kechi Beg 期以降の各文化の並行関係をはかる目安になることが予測され，今後更に緻密な研究が必要になろう。

次に，北部バルチスタンにおける QW 式土器要素について検討する。SJ 第Ⅲ期後半と RG－C段階において，QW式土器は前述の PP 土器と RG. RR 土器とを共伴している。PP 土器の文様は大胆な塗り潰しと粗線で構図を行う特徴をもち，比較的繊弱な QW 式文様と対照的である。この文様構成に多くの QW 式要素が取り入れられた（例えば，QW 14, 22, 23, 30, 31, 34など）。DS 第Ⅱ～第Ⅲ期にもこの PP 土器が混在していることが報告されている〔Fairservis：1956〕。RG. RR 土器は特異な波状文，魚鱗文，格子文，樹葉文をもつが，就中 QW 式14, 30が特に好まれた。しかし，この文様に塗り潰しが殆ど使用されていないことは注目すべき点である。なお，MDG 第Ⅲ期にもこの土器の文様が見られる。以上の彩文土器のほかに極く一部だが，Jangal 多彩文土器と Hanna Coarse 彩文土器がある。いずれもこの地方に特有なものである。SJ 第Ⅲ期の後，文化は断絶した。Rana Ghundai 遺跡も B 段階に入って大きなギャップがあり，その後，その近辺に栄えたハラッパー遺跡 Duki Mound 及び Dabar Kot 遺跡のハラッパー層と強い共通点をもつ新しい土器が登場する。前に SJ 第Ⅲ期は二分される可能性があると述べた。ここでは，QW 式土器との関連から，SJ 第Ⅲ後半期と RG－C 段階を QW 式土器との関連から，DS 第Ⅱ期～第Ⅲ期に並行させてよいと考える。

北部バルチスタンと比べて，中部バルチスタンの南部における土器文化の地域色はさらに濃厚である。AJ 第Ⅳ期になって，Nal 式土器は大きな発展を見せた。特徴的な球形の鉢と胴に突縁の付いた鉢及び器表に施された Nal 式多彩文がこのことを示している。AJ 式土器もここでピークに達する。それらの土器に比べると，QW 式土器の存在はほんの僅かである。AJ 第Ⅳ期には QW Ⅱ，Ⅵ式土器の破片があり，SD 第Ⅱ－ⅲ期にも QW Ⅵ式土器が検出されてはいる。またこの期に QW 式文様を描いた赤スリップがけの土器破片（PP 土器？）が両遺跡からも検出された。そして，表採品にも QW 式土器

が少なくない。この両遺跡周辺の他の遺跡でも Nal 式土器と QW 式土器との共存が確認された〔de Cardi：1964〕。しかし，全体として QW 式土器がこの地域に少ないことは事実である。

この時期の土器について，つぎの点が指摘できる。先ず土器の基本色は鈍黄色で，赤色が比較的少ない。この点で Quetta 地方の土器に近く，北部バルチスタンに優位を保つ赤色土器や赤からピンクへ変遷する Amri 式土器などとは対照的である。器形の面で小型土器を中心とした Nal 式土器に比べると，AJ 式土器は殆ど大型土器であるので，土器の使いわけが存在したようである。多彩文土器の伝統が続いているが，系統としては Nal 式文様をひいている。

Nal 式土器要素はバルチスタンで広く見られる。北から MDG 第Ⅲ期，SS 第Ⅰ期，Periano Ghundai，SJ 第Ⅲ期，DS 第Ⅱ期，Amri 第Ⅰ－C 期などに現れ，QW 式土器とは密接な関係にあることが明らかである。また，Nal 式文様のなかには QW 式文様に見られるような瘤牛文様とピーパル葉文様が用いられたことも両者の間の時代関係をほのめかしている〔Stein：1931〕。以上をまとめると，QW 式土器より若干早く出現した Nal 式土器と，QW 式土器要素とが，SD 第Ⅱ－ⅲ期と AJ 第Ⅳ期に認められる。したがって，SD 第Ⅱ－ⅲ期と AJ 第Ⅳ期が DS 第Ⅱ～第Ⅲ期に並行する。

さて，Amri において，第Ⅰ－C 期から第Ⅰ－D 期に移行する土器の様相に激しい変化はないものの，塗り潰しと塗り残しとによる瘤牛や山羊などの動物文の登場は，QW 式文様との関係を示すものであろう。また QW 式文様要素も一部の土器に認められる。しかし，Amri がインダス平野部に近いだけに，バルチスタン諸文化のなかで，一番早くかつ敏感に平野部の文化の動きを反映している。Amri 第Ⅰ－D 期には既に Kot Diji およびハラッパー両文化の土器が混在している。Amri 第Ⅱ－A 期にはいると，それらの土器が着実に増えつつあるなかで，QW 式文様要素も依然として用いられ，しかも，数の少なくない QW Ⅱ式灰色土器（Faiz Mohammad Ware）の典型的器種，尖った口縁をもつ浅鉢が残存している。だが，Quetta 方面とのつながりはもはや最後になり，Amri Ⅱ－B 以降，Amri 文化は終焉を迎え，ハラッパー文化に道を譲ったのである。全般的に以上の状況をとらえて，〔Meadow：1973〕を参照すると，Amri 第Ⅰ－D 期，第Ⅱ－A 期を DS 第Ⅱ～第Ⅲ期に比定することが妥当である。

Mehrgarh の第Ⅵ期では，「土器工房」らしいところから出土した土器の大多数が，QW 式Ⅰ，Ⅱと Ⅵ式の土器である。〔Jarrige：1979；Allchin：1982〕がこの時期を，MDG 第Ⅲ期，SS 第Ⅰ期，DS 第Ⅱ期などと並行させたことは適切な見解である。第Ⅶ

期は前代の土器系譜が続いているが，QW Ⅱ式灰色土器がますます増える。1000体を超えるテラコッタ女性像が出土し，多くはDS第Ⅲ期にも見られる「ゾーブ女神像」である。第Ⅶ期末にはKot Diji文化とハラッパー文化の要素が混入してきた。これはAmri第Ⅱ－A期の状況と共通し，Mehrgarhがインダス平野部に接近している地理上の位置により，平野部の文化といちはやく接触があったことを示している。その後おそらくハラッパー文化の拡大に圧迫され，Mehrgarh文化はまもなく途絶えた。それを受けてその北方にあるハラッパー文化の遺跡NowsharoやTakhti Mirなどが繁栄することになった。

最後に南部バルチスタンに大きな広がりをもつKulli式土器群を見たい。Kulli土器は主に赤っぽい無文土器と一部の淡黄色地に黒色ないし茶褐色で施文された彩文土器から成り，口縁の平らに伸びる鉢，肩の広い平底壺，器壁直立のゴブレット及び高い台脚付きのコップなどの器種が主流で鉢と平底壺はKulli式特有なものである。Kulli式土器の文様はやや特異な存在であり，幾何学文様，動物，植物文などを基本構成としているが，縦線充塡の波状文帯，斜線充塡の鋸歯文とナツメヤシの枝のような文様などの典型的な要素がある。そして，その塗り潰しと塗り残しの方法で描かれた，目が大きく，体が長い瘤牛と虎が，山羊や植物に取り囲まれて横向き一列に並ぶ図柄，及び変形したピーパル葉文様なども代表的な存在である。その文様の中にはQW式文様要素が多く見られる。QW 1，2，7，17，29，30などがそれである。その上，縞文様で飾られたテラコッタの瘤牛，「ゾーブ女神像」土偶などの存在も両者の年代関係を裏付ける。しかし，それらの要素はむしろMDG第Ⅳ－1，2期により近い。すなわち，Kulli式土器はQW式土器よりやや遅れるということである。土器の分布範囲からみれば，Kulli式土器はNal式土器と最も密接な関係にある。Sohr Damb遺跡やNindowari遺跡において，Nal式土器がKulli式土器より早く存在したことが確認された〔Hargreaves：1925；Casal：1966〕。一方，Las Bela地方においてNiai Buthi遺跡Ⅰ期，Edith Shahr遺跡を代表とする文化の前期系列（A－Complex）にはNal式土器とKulli式土器との共存が知られている〔Fairservis：1975〕。しかし，KulliとMehiにおいてはNal式土器が検出されていない。こうして，Nal式土器とKulli式土器は前者が後者より古いが，両者は一時的に並存していたこともあり，また，各自が分布範囲をほぼ守っていたとも考えられよう。

Kulli文化は主に南部バルチスタン海岸沿いに東西に分布しているので，その西隣りのBampur地方（Persia Baluchistan）の文化との接触と混合も考えられる。Bampur

における先史文化は6期に分かれている〔de Cardi：1968〕。第Ⅰ期と第Ⅱ期の土器様相はSS第Ⅰ期のそれに近く，鈍黄色土器と灰色土器を中心とするが，文様の面では地域色が強い。しかし，第Ⅱ期にはQW式文様要素が見られ（QW 2，8，10，16など），第Ⅲ期に入って，SS第Ⅱ期との関連が強く，そのまま第Ⅳ期に移行する。第Ⅳ期にはMDG第Ⅳ－1期との一致が認められる。Kulli式土器要素が現われるのは第Ⅴ期である。特徴的な文様と他に類のない平縁の鉢，広肩の平底壺がBampurの文化の第Ⅴ～第Ⅵ期にわたって取り入れられている。こういったことからも，Kulli式土器がQW式土器より時期的に新しいことは立証されよう。

Kechi Beg期ののち，バルチスタン全域において，土器の面における動向からうかがわれるように，地域文化が開花して，全盛期を迎えていた。そうした中で，QW式土器，殊にその複雑で華麗な文様の要素が最も強い波及力をみせ，各地域の土器文様のなかに執拗に浸透している。このように拡散浸透した文様要素を基準として，一つの並行関係を設定することができ，これをQuetta期文化とよぶことが相応しい（図4）。

バルチスタン初期農耕文化に先土器新石器時代，Kili Gul Mohammad期，Kechi Beg期およびQuetta期と四つの時期を設定した。4期の文化は，バルチスタンという特定な地域で多様な姿を呈しながらも，規律をもって展開している。こうした編年を特に文様構成に焦点をあてて検証した。これをほかの文化要素とのかかわりの中に検討することが残された問題であろう。しかし，他の文化要素を，以上にあげた遺跡の全部にわたり，土器形式や文様と同程度の密度をもって検討することは，現状では不可能である。なお，本論はQuetta地方の彩文土器とその文様を分析し，これを軸としてもっぱら検討を進めた。これは，いかにもQuetta地方の文化だけを一方的にとりあげた印象を与えよう。しかし，Quetta地方における文化は早く開花し，次々と続行して息が最も長く，系譜が比較的明確である。バルチスタンでこれほど広く深く文様の点で他文化の土器に浸透を見せたのは，Quetta地方の土器をおいて存在しない。水は高きから低きへ流れる。地理上の優位，歴史の永続からみて，Quetta地方の文化はバルチスタンの中で中心の地位をになっていた。Quetta地方の文化に逆にバルチスタン各地の諸文化が流入したこともまた事実であるが，それはQuetta地方から各地へという流れにくらべると，散発性を否めないマイナーな流れである。

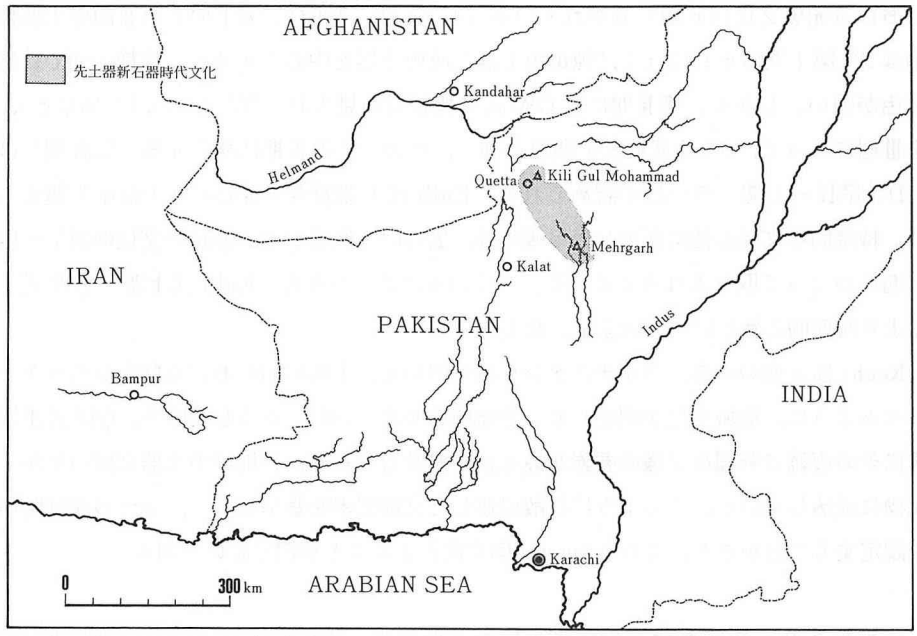


図1 初期農耕文化期のバルチスタン

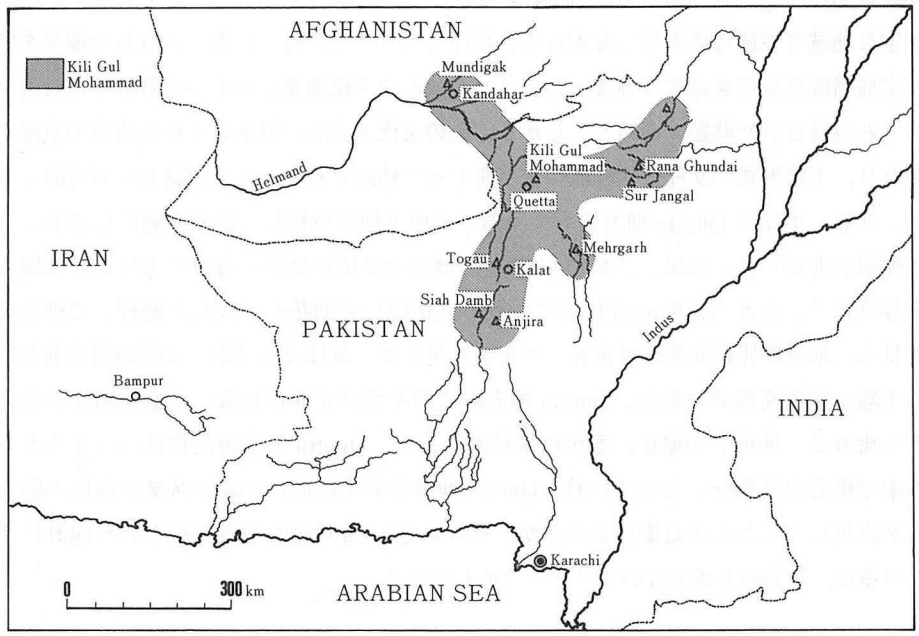


図2 Kili Gul Mohammad 期の土器分布

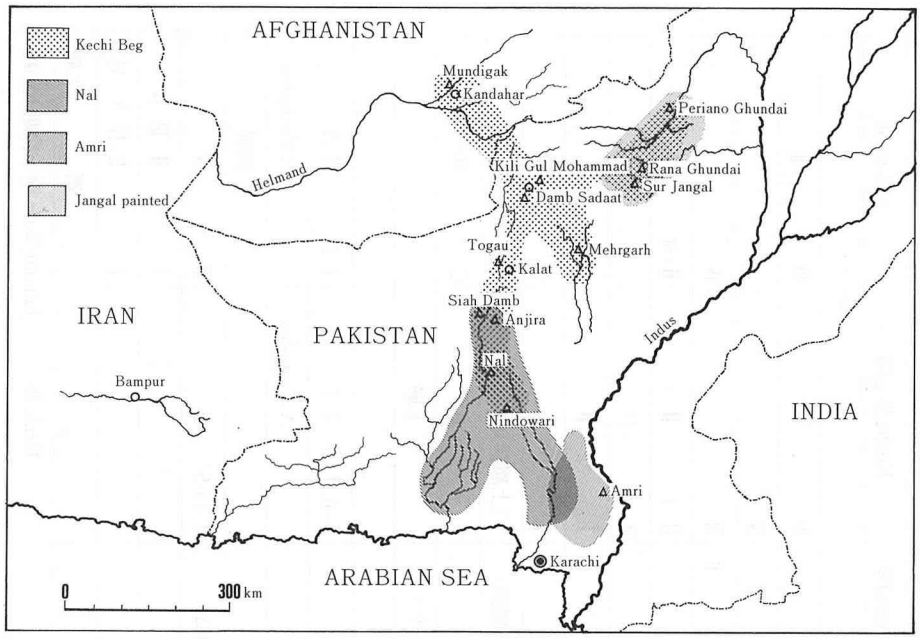


図 3　Kechi Beg 期の土器分布

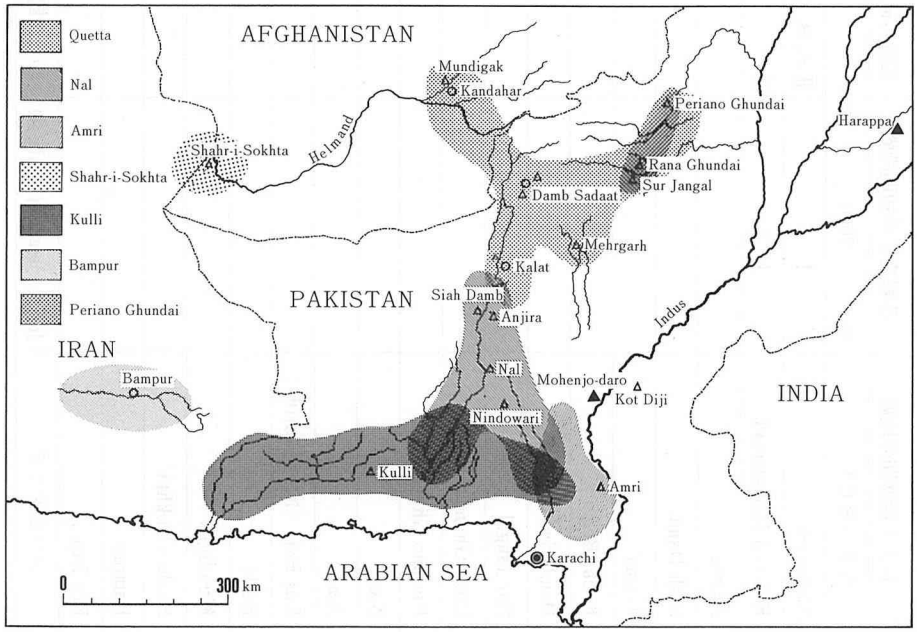


図 4　Quetta 期の土器分布

地域	彩文土器展開の段階	農耕文化の初期段階	Kili Gul Mohammad期	Kechi Beg期	Quetta期
	年代（BC）	8000 7000	4000	3000	
中部バルチ	Mehrgarh	Ⅰ	Ⅱ-A, B, C Ⅲ	Ⅳ Ⅴ	Ⅵ Ⅶ
	Kili Gul Mohammad	Ⅰ(？)	Ⅱ Ⅲ	Ⅳ	
	Anjira		Ⅰ Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
	Siah Damb		Ⅰ	Ⅱ-ⅰ Ⅱ-ⅱ	Ⅱ-ⅲ Ⅲ(？)
	Togau		A	B C D	
	Kechi Beg			Ⅰ Ⅱ	
	Damb Sadaat			Ⅰ	Ⅱ Ⅲ
北部バルチ	Sur Jangal		Ⅰ(下層部)	Ⅰ(上層部) Ⅱ Ⅲ(前半)	Ⅲ(後半)
	Rana Ghundai		F	E D	C B(？)
	Periano Ghundai		下層(？)	上層	
南部バルチ	Nal				
	Amri			Ⅰ-A, Ⅰ-B Ⅰ-C	Ⅰ-D Ⅱ-A
	Las Bela（Nindowari他）			A Complex	B Complex
	Kulli				初現
バルチ周辺地方	Mundigak		Ⅰ-(1-3)	Ⅰ-(4-5) Ⅱ	Ⅲ Ⅳ
	Shahr-i-Sokhta				Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ
	Bampur				Ⅰ Ⅱ-Ⅳ Ⅴ Ⅵ
	Kot Diji				下層 上層
メソポタミア		Jericho Jarmo 期 Halaf 期	Ubaid 期	Uruk 期	Jamdat-Nasr 期 初期王朝期

文　献

Allchin, B & R. Allchin. ,

1982 *The Rise of Civilization in India and Pakistan*, Cambridge University Press.

Biscione, R. ,

1973 Dynamics of an early South Asian urbanization : the First Period of Shahr-i-Sokhta and its connection with Southern Turkmenia, *SAA 1971*, 105-118.

Casal, J. R. ,

1961 *Fouilles de Mundigak*, *MDAFA*, 17, Paris.

1964 *Fouilles d'Amri*, *Publication de la Commission des fouilles archéologique* : *Fouilles du Pakistan*, Paris.

1966 Nindowari, A Chalcolithic Site in south Baluchistan, *PA*, 3, 10-21.

de Cardi, B. ,

1964 British Expeditions to Kalat, *PA*, 2.

1965 Excavations and Reconnaissance in Kalat, West Pakistan, *PA*, 2, 86-182.

1967 The Bampur Sequence in the 3rd Millennium B. C. , *Antiquity*, 41. 33-41.

1968 Excavations at Bampur, S. E. Iran, A Brief Report, *Iran*, 6, 135-152.

Fairservis, W. A. ,

1956 Excavations in the Quetta Valley, West Pakistan, *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, 45 (2), New York.

1959 Archaeological Surveys in the Zhob and Loralai Districts, West Pakistan, *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, 47 (2), New York.

1975 *The Roots of Ancient India*, Chicago.

Hargreaves, H. ,

1929 Excavations in Baluchistan 1925, Sampur Mound, Mastung and Sohr Damb, Nal, *MASI*, 35.

Jarrige, J. F. ,

1977 Excavations at Mehrgarh, Pakistan, *SAA 1975*, 76-87.

1979 Excavations at Mehrgarh : their significance in the prehistorical context of the Indo-Pakistan borderlands, *SAA 1977*, 463-535.

1981 Economy and society in the early Chalcolithioc Bronze Age of Baluchistan : new per-

spectives from recent excavations at Mehrgarh, *SAA 1979*, 93-114.

Meadow, R. H. ,

1973 A chronology for the Indo-Iranian borderlands and Southern Baluchistan 4000-2000 BC, in Agrawala, D. P. & A. Ghosh (ed.) *Radiocarbon and Indian Archaeology*, Bombay, 190-204.

1980 Early animal domestication in South Asia, *SAA 1978*, 71-92.

Piggott, S.,

1950 *Prehistoric India*, Harmondsworth.

Ross, E. J. ,

1946 A Chalcolithic Site in Northern Baluchistan, *JNES*, 5 (4), 291-315.

曾野寿彦

1974 『西アジアの初期農耕文化——メソポタミアからインダスまでの彩文土器の比較研究』, 山川出版社.

Stein, M. A. ,

1929 *An Archaeological Tour in Waziristan and Northern Baluchistan*, *MASI*, 37.

1931 *An Archaeological Tour in Gedrosia*, *MASI*, 43.

Tosi, M. ,

1968 Excavations at Shahr-i-Sokhta, a chalcolithic settlement in the Iranian Sistan. Preliminary report on the First Campaign, October-December 1967, *EW*, 18(1-2), 9-66.

1969 Excavations at Shahr-i-Sokhta, Preliminary report on the second campaign, September-December 1969, *EW*, 19(3-4), 283-386.

Wheeler, R. E. M. ,

1953 *The Indus Civilization*, 1st ed, Cambridge University Press.

謝辞：本稿は京都大学大学院文学研究科に昭和61年度に提出した修士論文の一部である。御教示を受けた小野山節，桑山正進両先生に謝意を表する。